博士論文要約

建国初期中国共産党の「中央民族訪問団」
―少数民族地域への対応と政策―

東京女子大学大学院人間科学研究科人間文化科学専攻
美麗和子

本論の目的

1949 年に新政府を樹立した中国共産党は、「民族平等」の方針を前面に打ち出した。これによって、多様な生活様式、政治統合の様態、宗教、風俗習慣を持つエスニック・グループが一律に中華人民共和国（新中国）の政治体制に編成されると同時に、あらゆるエスニック・グループの構成員が、一律な「中国人民」として存在することになった。

建国当初、新中国における実質上の憲法の役割を果たした「中国政治協商会議共同綱領（以下「共同綱領」）」の民族政策条項の一つである第五十条は、「中華人民共和国領域内の各民族は一律平等であって、団結互助を実行し、帝国主義および各民族内部の人民の公敵に反対し、中華人民共和国が各民族友愛合作の大家庭となるようにする。大民族主義および狭隘な民族主義に反対し、民族間の偏見・圧迫および各民族の団結を分裂させる行為を禁止する」と定めている。この条文における「平等」と「団結」の意味、すなわち中国共産党が目指していた多民族国家の姿とは、どのようなものだったのか。本論は、建国初期の共産党政権が中国におけるさまざまな民族を、「平等」と「団結」の方針の下に「民族大家庭」という新しい政治体系に組み込むための民族工作の初期段階を研究対象として、当時構想された国家の少数民族に対する政治統合の雛形を求め、現代における中国少数民族の政治統合のあり方とのつながりや断絶を認識する一助となる考察を目的とする。

具体的には、「中央民族訪問団」（以下“中央訪問団”）を事例として、その組織構成や工作方針、活動の内容を明らかにした。

本論の主題

中央訪問団とは、1950年から1952年にかけて、中国共産党（以下“中共”）中央が西南、西北、中南、東北並びに内蒙古の各少数民族居住地域に派遣した使節団である。新政権は、

この活動によって各地の少数民族と初めて直接の接触を果たした。訪問団の主な活動内容は、新政権とその民族政策に関する宣伝、歌舞や映画などの慰問活動、衛生医療サービスの提供のほか、現地に居住する少数民族の意見のヒアリングや地域における政治統合の状況把握、各民族の政治・経済・風俗・言語などの現状調査であった。

本論の検証課題

本論では、以下の四点を主な検証課題とした。

第一に、中央訪問団の組織体制と活動内容を明らかにする。具体的には、①組織構造と成員構成、②各団の活動期間と行程の整理、及び活動範囲とした地域の把握、③工作の目的と任務、及び工作方針、④各種の活動内容などを整理した。すなわち、建国初期の段階で実施された民族訪問プロジェクトの準備と実行の状況をつぶさに観察し、その組織構成から現地の調査と活動内容、訪問団と現地少数民族地域の代表が交換した慰問品・献上品に至るまで、活動に関する一つ一つの要素を拾い上げた。

第二に、当時の中央指導者たちの民族工作に対する基本認識を探る。国土面積のおよそ6割、かつ全国総計で2万㎞を超える陸地国境線に沿うように居住する「兄弟民族」について、当時の中共の指導者たちが何を喫緊の課題として認識し、いかに対処しようとしていたのか。すなわち、政権建設の過程における少数民族問題の位置づけと、これらの問題に対応するために中共が目指した方針を探る。ここでいう「指導者」とは、①民族政策のみならず、全ての国家政策に関わる中央指導者（例：周恩来）、②民族政策担当の中央指導者（例：李維漢）、③中央から少数民族地域へ派遣された使節（例：劉格平）、④地方で統括する中央指導者（例：鄧小平）という4つの立場を想定している。

第三に、中央訪問団が調査した少数民族事情を分析する。上述したように、中央訪問団は少数民族の慰問の傍ら、現地調査を実施した。この調査に基づいて編集された報告書を読み解くことにより、訪問団が少数民族状況をいかに把握したのかを明らかにする。本論では、特に中国西南部に位置し、「大分散、小聚居（広い範囲に散らばり、少人数で聚居）」かつ、漢族と雑居するという特徴を持つ雲南省の調査報告を重点的に分析した。

第四に、訪問団員として参加した人物が残した文章から、少数民族工作の現場の状況を再構成する。すなわち、中央指導者によって工作の目的が示され、団員に対して事前学習が実施されたが、こうした準備を経て現地に向かった訪問団員が、実際の少数民族社会とどのように向き合ったのかを、団員個人の目を通して検討した。

研究の対象

本論で主要な研究対象とした資料群は、以下の4種類に分けられる。

資料群①：当時発行された共産党中央委員会、地方委員会機関紙。具体的には、『人民日報』（共産党中央発行）を中心に、『雲南日報』（雲南省委員会発行）、『新黔日報』（貴州省委員会発行）を補助的に用いる。

資料群②：中央訪問団により作成された調査報告書。ただし、当時作成された一次資料は現在散逸しているため、本論で主に依拠したのは1986年に出版された民族問題五種叢書・中国少数民族社会歴史調査資料叢刊『中央訪問団第二分団雲南民族情況彙集』（以下『彙集』）をはじめとする公刊資料である。『彙集』は、中央訪問団が直接聞き取りを行ったもの、座談会記録のほか、各地の現地政府による統計資料などで構成され、民族識別調査以前の地域事情、及び民族事情が記載されている。

資料群③：鄧小平ら中央指導者、劉格平ら訪問団責任者の談話録。内部発行の出版物、及び公式出版物の双方が含まれる。特に、鄧小平の談話録は発話から半年後に配布された内部発行版と、後年、専門部署により編集された上で改めて発行された公式出版物とが存在する。本論では、時代背景・政治的環境の差異により、中共が同一の発言録をどのように取り扱ったのかについても注目した。

資料群④：1990年代以降に刊行された、訪問団員たちの個別の回想録など。本論で参照した主要な回想録は、西南訪問団第二分団の副団長として雲南省を訪問した民族幹部（回族）の王連芳によるもの、同じく西南第二分団の一般団員として南京博物院から派遣された考古学者、宋伯胤が当時綴った日記である。この他、西南第三分団副団長として貴州省を訪れた費孝通が中央訪問団での経験に言及した文章を発表しており、これについても一部参照した。

管見の限りでは、全ての資料群で、各訪問団により現存する出版資料の量にばらつきがある。すなわち、最初に派遣された西南訪問団の資料が最も多く、次いで西北訪問団、中南訪問団の順に減少し、最後に派遣された東北訪問団の資料が最も少ない。こうした事情から、本論では西南訪問団に関連する資料をより多く用いている。

各章の概要

本論は、序章、終章を含めた全6章で構成される。以下、各章の概要を述べる。

序章ではまず、本論における4つの検証課題を前述の通り設定した上で、関連研究を検討した。先行研究には、大別すると①中国の少数民族政策研究、②少数民族と中央政権との関係、③少数民族の社会と文化を対象とする研究、④中国における民族学と政治、の4つのテーマが見出された。本論は、上述した4分野のうち、②及び④に近接するテーマに関心を置いている。すなわち、民国期と新中国建国期の繋ぎ目に当たる時期、政権・民族学者・少数民族が、国内外のさまざまな情勢の変化に伴って新しい局面を迎えた第一段階を、主に中央政権の側から再現することを目指した。なお、上述の先行研究④の関連事項として、中央訪問団が実施した少数民族調査ではいかなる方法論が用いられたのかを確認するため、建国前後の中国における少数民族研究の潮流を概観した。中国における人類学・民族学研究は、中華民国の成立期に始まったが、その内実は、漢族への同化主義的色彩が強かった。西洋から流入した進化論や啓蒙主義のほか、中華民国の民族政策方針であった大漢族主義の影響が強かったと思われる。一方、その後の新中国では、民国期に国内外で訓練を受けた民族学者らが民族工作に動員されたが、民族研究自体は国家による管理が進み、それ以前に形成されてきた学術的潮流はほとんど継承されず、マルクス主義を基礎とする理論構成へと塗り替えられた。すなわち、政治のイデオロギーに伴走する新たな民族学が「誕生」したのである。

第１章「中央訪問団の概要」では、中央訪問団について残された記録をまとめ、中国国内の辺境各地に派遣された訪問団の全体像を描いた。本論における第一の検証課題、すなわち中央訪問団の組織構成と活動内容は、この第１章で述べた。訪問団は、地域別に計4団が派遣されており、各団の主要工作地域は、西南訪問団が西康・雲南・貴州の3省、西北訪問団が陝西・青海・新疆・甘粛の4省、中南訪問団は広東・広西・湖南の3省、東北訪問団は綏遠・吉林の両省及び内蒙古自治区である。訪問団のメンバーは、中央政府の各部門に所属する人員や大学生などから抜擢されたほか、現地政府の人員も投入され組織された。その組織構成を見ると、幹部として登用された人材には、少数民族出身者や民主同盟所属の人物が多いという特徴があり、当時の政治的状況が反映されているといえる。一方、訪問団の活動内容を見ると、住民との接触手段として、現地の社会階層に応じて様々な形式の集会が開催された。民族上層に対しては、主に民族代表会議や座談会を通して意見聴取を行った。また、一般住民に対しては慰問として写真や絵画の展示、医療サービス、映画上映や歌舞のほか、西北訪問団は京劇の上演も行い、これらに並んで政策宣伝が行われた。各訪問団の活動終了後に発表された総括報告からは、地域ごとに異なる特徴が見出される。

西南訪問団では、新中国の民族工作のパイロット・スタディ、すなわち民族区域自治がいち早く実施されたのに対し、西北訪問団では現地住民との接触とヒアリングが活動の中心であったと思われる。また、中南訪問団の総括報告では、居住する少数民族を漢族との関係や階級の視点から分類した上で、社会改革の実行可能性を模索しており、東北訪問団は、朝鮮戦争の発生や内蒙古自治区成立から5周年を迎えていた当時の状況に鑑みて、現地視察が主要目的であったと推測される。

第２章「中央指導者の指示と講話に見る中央訪問団の基本方針」は、第１章で述べた中央訪問団の概要を踏まえて、さまざまな立場にある各指導者による発言の比較と、全体像の考察を要とする。これは本論の第二の検証課題、すなわち中共の指導者たちの民族工作に対する基本認識の検討に相当する。特に、西南地域の統括責任者であった鄧小平が中央訪問団の歓迎大会で発表した「西南地区の少数民族問題についての報告（原題「関於西南少数民族問題的報告」、以下「報告」）」を中心に述べている。各指導者の発言には、以下のような特徴が見られた。①周恩来（全ての国家政策に関わる中央指導者）及び②李維漢（民族政策担当の中央指導者）は、少数民族に対して、歴史的に少数民族を圧迫してきた漢族の代表としての「謝罪」と、慰問を中心とした工作の方針を示している。③劉格平（中央から少数民族地域へ派遣された使節）は、漢族がその他の民族をリードしていくことを前提とした民族自治の原則論を語っている。④鄧小平（地方で統括する中央指導者）は、国防政策、地域政策の一環として少数民族政策を捉える姿勢が、より明確であった。すなわち、鄧の「報告」において、民族政策とは西南地域の特徴に合わせた政策の一部であり、民族団結とは地域掌握と政権安定のための目標であった。少数民族に対しては、まず経済や衛生面といった現実的な利益をもたらすことで政権への信頼をかち取り、そこから民族区域自治や教育、文化工作といった政策の展開を目指す戦略をとっていた。

また、本章では、西南訪問団の活動に際して、団員に向けた行動綱領として示された「中央訪問団の任務、工作の方法及び心得（原題「中央訪問団的任務、工作方法和守則」）」の内容についても検討した。その内容は、「Ⅰ．任務」「Ⅱ．工作方法」「Ⅲ．守則」の3部で構成されており、訪問団員の任務とは共産党中央を代表して新政権の宣伝、慰問と現地調査を行うこと、工作の方法として現地軍政委員会の指導により活動することや、少数民族へのアプローチは現地の民族幹部や人望のある名士から始めることなどが示されている。また、「守則」の部では、当時把握されていた各少数民族の具体的な風俗習慣や禁忌が示されている。

第３章「少数民族調査の内容――『雲南民族情況彙集』」では、本論の第三の検証課題、すなわち、中央訪問団が調査した少数民族事情の分析として、西南訪問団第二分団の担当地域であった雲南省に焦点を当てた。ただし、主要資料とした『彙集』の出版に至るまでには、調査実施時点から30数年間の政治的事情が反映されており、取り扱いには注意する必要がある。一方、『彙集』の内容は、ほとんどが各地域・各民族の経済状況の解説に費やされており、習俗や社会制度についての記述は少ない。その理由は、中央訪問団が現地調査に当たって策定した調査設計の特徴にあり、さらに遡ると、中共が国家建設において掲げた新しい概念である「人民」の定義と関わってくる。そこで、本章では内容分析に先立ち、2つの作業を行っている。その一つは、西南訪問団第二分団による調査の進行及び結果の整理の過程も含めた『彙集』出版までの経緯を整理する作業であり、これによって『彙集』が複数の関係者による編集を経ていることを示した。もう一つは、王朝期と民国期に見られる、国家における少数民族の位置づけ、すなわち「華夷秩序」（皇帝を「華」つまり世界の頂点とし、異民族を皇帝の配下にある民よりも後れた「夷」とする秩序）、及び「中華民族」（領域内の各民族が融合して一民族となり、一国家を築く構想）の概念と、中共が掲げる「共同綱領」において少数民族を位置づけた「人民」の概念――多民族国家の性格が積極的に標榜される一方、いかなる民族も「人民」の「団結」を脅かすことは許されず、各集団が一律平等な社会とする――を対比させる作業であり、この「人民」の位置づけが中央訪問団の調査設計にも適用されていることを明らかにした。

『彙集』の記載内容の分析に当たっては、量的な観察を基礎として、中共が少数民族地域に対して持っていた関心の重点や現地社会に対する解釈、政権建設の方向性を検証した。この分析を通して見られた中共の少数民族に対する関心として、以下の3点が挙げられる。第一に、記載内容に経済状況、特にマルクス主義経済学の概念である「生産関係」に関する情報が多い点などから、中共が必要としていた「民族情況」とは、民族区域自治を早期に実施するために必要であった各民族の分布状況や各地域の生業などの居住実態のほか、各民族を発展段階で捉えると同時に、階級区分を行うための情報であったと思われる。第二に、漢族と少数民族、あるいは少数民族間の力関係にも調査の重点が置かれたと思われる。その眼差しにおいては、特定の民族性や各民族の個性は調査目的の第一義とはならなかった。第三に、前述の通り、各地で「生産関係」の調査や住民の貧困に関する情報が丹念に集められていることから、中共の最も重要な命題は、「人民」をまず「食べさせる」こと、すなわち「搾取」の構造を撲滅して貧困から脱出させることであり、かつその旗振

り役はほかでもない中共政権であるという信念が、調査内容に反映されていると思われる。なお、本章の最後に、比較の対象として、西南第三分団団長費孝通による会議発言録「貴州少数民族情況及民族工作（初稿）」について触れた。民族学者の費は、歴史的背景や民族事情、経済的な要素を客観的に分析し、民族問題をマルクス主義的理解へつなげると同時に、貴州省の多様な民族がそれぞれ抱える具体的な状況を詳細に示し、民族間の複雑な関係を浮き上がらせており、『彙集』とは異なる少数民族社会への視座が与えられた。

第４章「訪問団員の見た少数民族の姿」では、第３章で用いた『彙集』の元になった調査の実施や報告書の執筆に携わった現場の民族工作者に注目した。本論の第四の検証課題、すなわち、訪問団参加者が後年残した文章から、民族工作の現場状況を再構成する作業に相当する。中央訪問団には、①民族学者や学生など、もとより民族事情の研究を専門とする者、②古参の共産党員で少数民族出身の幹部、③同じく中央から派遣された歌手や舞踏家、作家など現地の慰問や取材を担った技能者、④現地民族のリーダーで、新政権樹立前後に共産党へ合流した者、といった多様な経歴を持つ人物が参加した。そのことによって、中央訪問団の各団により活動の方向性も異なっていたと思われる。したがって、中共の民族政策を作り上げた集団の性格を理解するために、中央訪問団の研究においても、人物の角度からの分析を要する。本論では、上述②群に該当する人物として、西南第二分団の副団長を務め、中央訪問団の活動終了後も現地に留まって民族工作に従事した王連芳を取り上げ、彼の回想録『雲南民族工作回憶』（1999年初出、本論は2012年版を参照）から、個人の視線で捉えた中央訪問団の活動と現地民族の様子を述べた。王の回想には、雲南に居住する様々な民族が登場するが、なかでも王は搾取構造を持つ社会制度に注目している。一方で、現地少数民族社会の統治階級が保持していた王朝認識を読み取って、中央訪問団の活動終了後の民族工作にもその知見を生かしている。すなわち、古参の民族幹部として、自ら身につけた社会主義理論を基礎としながらも、独自の洞察力で民族を観察していたのである。

終章は、前章までの論述を踏まえて、以下の内容を論じた。第一に、中央訪問団の活動がその後の民族工作に与えた影響について、具体的な事例を挙げた。第二に、第２章で論じた鄧小平の「報告」は1989年、中共中央文献研究室による改訂を経て『鄧小平文選』（以下「文選」）の一篇として出版され、これ以降、当該改訂版が中共の公式資料となっているが、本章では「報告」と「文選」のテキストを比較して異同を整理し、変更や削除を受けた箇所の傾向を分析した。その結果、建国初期の現地政策の一環として語られた民族工

作の談話は、約40年後の字句整理を受けて発話当時の背景の具体性や緊迫感が濾過され、現場から乖離して一般化された民族政策の教科書へと変貌していたことが明らかになった。そして、この事例を元に、建国初期から改革開放期、すなわち1950年代から1980年代に至るまでの中共政権による政策方針の「一貫性」の保持について論じた。第三に、本論で述べてきた中央訪問団の活動から、政府と少数民族との関係性の構図を分析し、中共の民族政策における「団結」と「平等」の論理について考察した。

周知の通り、共産党の革命とは「被圧迫階級による革命」であり、革命主体である「人民」には少数民族も含まれている。ところが、第２章で述べた通り、劉格平の発言からは「漢族社会と少数民族社会の歴史発展過程のステージは異なり、漢族が中国社会のリーダーとして少数民族を牽引する」という認識の下で民族工作が行われようとしていたことが明らかである。そこでは、表面上は王朝時代に見られた「華」と「夷」の区分が消えていたとしても、漢族と少数民族が異なる発展段階に位置づけられたことにより、かつての華夷秩序の発想が「先進—落後」の一元的なマルクス主義の社会発展段階論に投影されたように見受けられる。また、中央訪問団の活動においても、現地住民との交流や交渉などの場では、例えば「毛沢東の『関懐』」（「関懐」は中国語で上の者が下の者を配慮する、気にかけるというニュアンスを持つ語彙)がスピーチや新聞記事において用いられている。つまり、少数民族を革命の主体である「人民」に据えた上で、「大救星（毛沢東）—人民」の構図を用いながらも、王朝時代の「華—夷」、「朝廷—辺境」「中心—周縁」の枠組みが再現されたかのように見える。すなわち、政策構想のレベルにおける主観では、近代国家建設を目的とした「人民」という概念が前面に出されたのに対して、宣伝活動のレベルに落とし込まれた段階では、結果的に華夷秩序の構図に影響されていたと思われる。

中共が掲げた「団結」とは、共産党政権の下で先進的な集団である漢族が「牽引」する団結であり、「平等」とは、イデオロギーにより統一された政治体制下において民族的個性を超えた「人民」としての一律平等であった。ただし、そこには中国における歴史的な政治概念も投影され、少数民族に対する政治統合の雛形へと共に埋め込まれていったのではないかと考えられる。